

日本天文学会 早川幸男基金による 渡航報告書

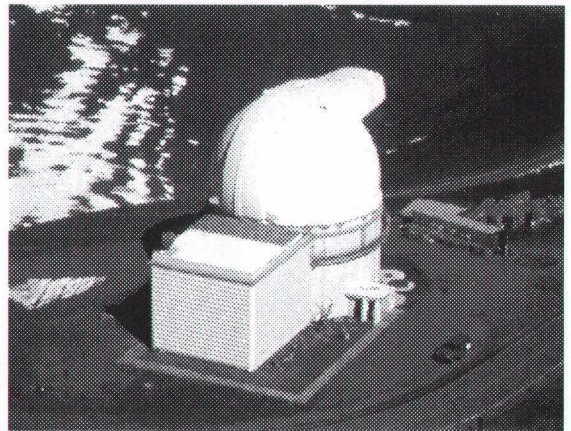
「(2月) 2日にこっち来れる？」

と、突然ハワイから電話がかかって来ました。ハワイ大学 88 インチ望遠鏡で突然、観測時間を確保できたというのです。今は日本時間の2月1日 18時頃.....、なんと、あと1日ありません！ まず、指導教官の小山勝二教授に出張の認可と苦笑をもらい、日付変更線を越えることで稼げる時間を頭のなかで計算しながら航空券と宿泊を手配し、そして道祖神に祈る間もなく出国。慌ただしい出発ですが、何とか観測に間に合いそうです。

さて、私のような衛星チームにいる者にとって、地上観測の観測時間割り当ての柔軟さにはいつも驚かされます。1年に2回の定期的な観測公募以外にも、運用に余裕ができると Service Time と称して何の前触れもなく観測公募が出ます。今回も1月31日にハワイ大学から観測公募が出たと同時に、国立天文台ハワイ観測所の共同研究者である後藤美和さん、小林尚人さんに即応していただき、運良く3晩の観測時間が確保できたというわけです。

私たちの観測は、QUIRC という近赤外線カメラを用いて、中質量星生成領域 OMC-2, OMC-3 の J, H, K 3色撮像をするというものです。既に私たちは Chandra 衛星を用いてこの領域を X 線で観測しており、前主系列段階にあるたくさんの点源から X 線を発見しています。近赤外追観測でそれぞれの天体の質量と年齢を見積もり、前主系列星から放射される X 線がこれらとどのような関係にあるか調べようという目論見です。強風のため、多少時間をロスしましたが、予定通りのデータを取ることができました。

ハワイ大学 88 インチ望遠鏡について簡単にご紹介しましょう。この望遠鏡は、通称“UH88”(ユ



UH88 望遠鏡

ーエイチハチハチ) と呼ばれ、1970年にハワイ島、マウナケア山頂に建設されました。マウナケア山頂と言えば、今や地上観測のメッカであり、すばるを初めとする大望遠鏡が目白押しなのですが、その中で UH88 は小さいながらも現役の望遠鏡として活躍を続けています。“What can be done with smaller telescopes should be done with smaller telescopes.” という、ハワイ大学の Alan Tokunaga 教授の言葉に端的に表されているように、大望遠鏡と小望遠鏡の棲み分けがうまくなされているようです。広視野の撮像観測、長期的光度変動をモニターする観測、大望遠鏡のための予備観測など、小望遠鏡でもできることはたくさん残っています。幸い、tennet:1837にあるように、本望遠鏡は来年から観測時間の10%が日本枠として確保される運びとなりましたので、適切なテーマをお持ちの方はチャレンジしてみてもいかがでしょうか。

最後になりましたが、今回の渡航を可能にいただいた日本天文学会及び早川基金関係者のみなさまに篤くお礼申し上げます。

辻本匡弘

(京都大学大学院 理学研究科)